

閱微草堂筆記 子不語

920

中国古典文学大系 42

平凡社

閱微草堂筆記 紀昀作

子不語 袁枚作

述異記 東軒主人作

秋燈叢話 王楫作

諧鐸 沈起鳳作

耳食錄 樂鈞作

前野直彬 訳

訳者紹介

まえのなまえ

前野直彬 大正9年東京都生。東京大学文学部卒。
東京大学教授。専攻 中国文学。主著訳書 『神女と
の結婚』（中央公論社「文学における彼岸表象の研究」
所収）『唐詩選』（岩波文庫）『唐代伝奇集』1,2（平凡
社「東洋文庫」）『六朝・唐・宋小説選』『唐代詩集 下』
（平凡社「中国古典文学大系」）現住所 東京都豊島
区西巢鴨1-3-1

中国古典文学大系 全60巻

閑微草堂筆記 子不語 述異記 秋燈叢話 諸鐸 耳食録

第42巻

昭和46年2月5日 初版発行

定価 1700 円

訳者との申
合せにより
検印を省略
いたします

訳者 前野直彬

東京都千代田区四番町4番地

発行者 下中邦彦

発行所

郵便番号 102
東京都千代田区
四番町4番地
振替・東京29639

株式会社 平凡社

落丁・乱丁本はお取替えいたします
© 株式会社 平凡社 1971

印刷 東洋印刷株式会社
製本 株式会社 石津製本所

0397-312420-7600

目次

一 閑微草堂筆記

紀 昀 作

灤陽消夏錄

序	三
一 人を見る狐	四
二 学問の光	四
三 天 罰	五
四 狐の忠告	六
五 冥府の夢	八
六 まぼろしの姿	九
七 幽霊はいないと言う幽霊	一〇
八 山中の女	一一
九 翠 雲	一二
一〇 宿舎をのぞく女	一二
一一 狐を封じる法	一三
一二 化物を恐れぬ人	一四
一三 窓外の声	一五
一四 馬の身の上話	一六
一五 幻 術	一七

六 妾の復讐	一六
七 亡霊の手形	一六
八 夜中に出る女	一六
九 貞女の魂	一六
一〇 占いと運命	一七
一一 鞭 の 数	一七
一二 餅売りの魂	一七
一三 狐に化けた女	一七
一四 貞女の再婚	一七
一五 軽薄な貞女	一七
一六 神 罰	一七
一七 亡霊が見える人	一八
一八 化物の暇つぶし	一八
一九 功 罪	一八
二〇 試験場の怪	一八
二一 冥界の法律	一八
二二 袋の中の蜂	一九
二三 人をこわがる幽霊	一九
二四 机のわきの幽霊	一九
二五 化物屋敷のからくり	一九
二六 幽霊の真似 一	一九
二七 幽霊の真似 二	一九
二八 色のいましめ	一九
二九 貞女の売春	一九
三〇 貞女の死	一九
三一 小 人	一九

三	砂漠の風	三
三	通りがかりの娘	三
三	身代りの竹	三
三	妻を奪う陰謀	三
三	箱から出る手	三
三	身代りを待つ幽霊	三
三	色にふけらせる報恩	三
三	二人の女中	三
三	幽霊のたくらみ	三
三	義侠心	三
三	転生しかけた人	三
三	妻を恋う幽霊	三
三	来世の寿命	三
三	疫病神との戦争	三
三	父親の幽霊	三
三	窓から下りる幽霊	三
三	程朱の学	三
三	野ざらし	三
三	にせの巫女と狐	三
三	妻に打たれる狐	三
三	母を守る音	三
三	狐の仕返し	三
三	狐の妾	三
三	硯を投げる	三
三	狐の戦争	三
三	地中に沈む幽霊	三

六	泥人形の兄	六
六	一回 煞	六
六	一夜の雨	六
六	冥土の令状	六
六	僧と道士	六
六	つむじ風	六
六	呪いの本	六
六	喧嘩をした幽霊	六
六	棺をこわされた幽霊	六
六	壁から出る顔	六
六	冥界の隠者	六
六	妖怪は人がおこす	六
六	青苗神	六
六	先妻の幽霊	六
六	夫を食う妻	六
六	冥王の裁き	六
六	序	六
六	不貞とされた貞女	六
六	道士の金	六
六	甘い井戸	六
六	二人の老人	六
六	くすねた金	六
六	幽霊をこわがる勇士	六
六	無能な役人	六

二六	心のこり	一〇	二七	幽霊の妻	一〇〇
二五	裸の幽霊	一	二六	途中で会った娘	一〇一
二四	狐の報恩と深慮	八一	二九	深慮	一〇二
二三	飲み屋の幽霊	八一	三〇	夜中の冷氣	一〇三
二二	婆さん狐	八二	三一	狐の幽霊	一〇三
二一	取りもち婆のからくり	八三	三二	温厚の害	一〇四
二〇	箒の怪	八六	三三	めぐり会い	一〇五
一九	色の戒め	八六	三四	天井の笑い声	一〇六
一八	塞外まで来た幽霊	八七	三五	地を這う化物	一〇七
一七	賊と戦う老婆	八八	三六	腹負將軍	一〇七
一六	罪ほろぼし	九〇	三七	虎の神	一〇八
一五	狐の妄念	九〇	三八	一善の報い	一〇九
一四	鳥をかついだ男	九〇	三九	餓鬼	一一〇
一三	砂漠の中の丘	九二	四〇	ばらばらの化物	一一〇
一二	刀筆	九二	四一	家庭教師のつとめ	一一一
一一	幽霊の道案内	九三	四二	精進の由来	一一二
一〇	幽霊と狐の喧嘩	九三	四三	円光術	一一三
〇九	生霊	九三	四四	銀船の怪	一一三
〇八	烈女	九四	四五	妄念	一一四
〇七	初夜の心中	九四	四六	医者 of 罪	一一五
〇六	風雅な狐	九五	四七	亡妻の魂	一一五
〇五	逃げた狐	九六	四八	戦死者の魂	一一六
〇四	奇門の術	九六	四九	泣く幽霊と笑う幽霊	一一七
〇三	夜中の巨人	九七	五〇	狐に化けた人	一一八
〇二	仙界からの誘い	九八	五一	狐を追い払う法	一一八
〇一	のっぺらぼう	九八	五二	借金を返させる幽霊	一一九

一五	娘を盗んだ老婆	三〇
一四	迷宮入りの事件	三三
一五	狐と道理	三三
一六	少年と老婆	三三
一七	狐の不孝者	三四
槐西雜志		
序		三六

一八	節婦の社	三七
一九	化物に驚いた化物	三七
二〇	土地の神と城隍神	三六
二一	骨肉の鑑定	三六
二二	父子の縁	三〇
二三	水中の粟	三三
二四	碁を打つ仙人	三三
二五	狐が恐れる人	三三
二六	酒飲みの幽霊	三三
二七	狐にだまされた二人	三四
二八	神の拳	三五
二九	県令の魂	三六
三〇	盲人の院	三七
三一	車に乗せた少年	三八
三二	吸血鬼の茶店	三八
三三	芸者の心意気	四〇
三四	博打の金	四二
三五	狐の妻	四二

一六	西域の商人と妻	三三
一七	妾の魂	三三
一八	狐を退けた人	三三
一九	裸の狐	三三
二〇	狐の身代り	三三
二一	荒れ寺の化物	三三
二二	姑と息子	三三
二三	首をくくった嫁	三三
二四	墓の中の心臓	三三
二五	占いの術	三三
二六	予言	三三
二七	鐘の怪	三三
二八	下僕とその妻	三三
二九	危急の処置	三三
三〇	墓碑の文章	三三
三一	狐の婚礼	三三
三二	冥界の夫婦	三三
三三	芸者と狐	三三
三四	にせの大尽	三三
三五	割れ甕の怪	三三
三六	幽霊のたくらみ	三三
三七	来世の夫婦	三三
三八	書を求める幽霊	三三
三九	川を渡る幽霊	三三
四〇	山中の音楽	三三
四一	矛盾	三三

一五	幼少のころ	一五	沈んだ狛犬	一五
一五	死んでもなおらぬ	一五	悪ふざけ	一五
一五	運命を予知する幽霊	一五	狐の孝女	一五
一五	花 妖	一六	道士と美少年	一六
一五	人形の怪	一六	化物屋敷	一六
一五	因 縁	一七	生死の占い	一六
			上元の夜の美人	一七
			墓守りと狐	一七
			にせの狐	一七
姑妄聴之			幽霊の酒宴	一八
序			化物の悪ふざけ	一八
一六	幽明の路	一八	仙人の筆跡	一八
一六	三宝と四宝	一八	狐の入婿になった人	一八
一六	水中の幽霊	一七	論争する幽霊	一八
一六	落穂ひろいの女	一七	夜中の歌声	一八
一六	幽霊の銀	一七	一字の争い	一八
一六	蘭 の 虫	一八	竈の中の狐	一七
一六	幽霊を犯す人	一八	夫婦喧嘩と狐	一七
一六	神女の足跡	一八	裸の幽霊	一七
一六	藤と青桐	一八	幽霊の誘い	一七
一六	世の進歩	一八	狐の報復	一七
一六	逃げた女中	一八	狐高の幽霊	一七
一六	生き返った妻	一八	道士の呪い	一七
一六	李生と妻	一八	生き馬の目をぬく	一七
一六	山中の道士	一八	妾の良計	一七
一六	農婦の夢	一八	至剛の氣	一七
一六	孝子と盗賊	一八		
一六	幽霊の詐欺	一八		

二四	女 俠	二六
二四	罪人の妻	二七
二五	人を食う幽霊	二九
二五	首くくりを助けた人	三〇
二五	訴訟の勝敗	三三
二五	幽霊の博打	三三

樂陽統録

二五	序	三四
二五	貞女の淫女	三五
二五	先夫の幽霊	三五
二五	牧童と大蛇	三七
二五	主人と使用人	三六
二五	狐に化けた芸者	三六
二五	祈禱師の最後	三〇
二五	妾となる運命	三三
二五	女中の魂	三三
二五	横 虎	三三
二五	金持の奸計	三四
二五	暴力と色気	三五
二五	男女の道	三七
二五	学者の世間知らず	三六
二五	生きながら死んだ人	三九
二五	幽霊の手くだ	四二
二五	汝来のこと	四三
二五	高德の僧尼	四三

二子不語

袁枚作

二四	盗みと姦通	二四
二五	幽霊をこわがらぬ人	二四
二五	夫婦の再会	二六
二五	狐のいたずら	二七
二五	酒豪たち	二八
一	李 通 判	二五
二	南昌の士人	二五
三	鄭都の県令	二六
四	処罰された煞神	二六
五	神の毬になった胡求	二九
六	着物を着てつかまつた幽霊	二六
七	大衆上人	二六
八	まだ受け取らぬ大福	二六
九	地 窮 宮	二六
一〇	蝴蝶の怪	二六
二	関東の毛人が人を餌にすること	二六
三	起きあがりこぼし	二六
三	趙生と李生	二六
四	関帝神の裁き	二七
五	恨みを訴えに來た死体	二八
六	だまされた雷	二九

幽霊が人の名をかたつて祭られること	二七〇	酒ずきな冥土の役人	二〇一
羅刹鳥	二七一	李倬	二〇二
水仙殿	二七三	お利巧なお化けさん	二〇三
年子	二七五	鳳凰山が崩れたこと	二〇四
鄱陽湖の黒魚の精	二七四	餓える土地神	二〇五
鄱陽の小神	二七五	薄い棺の運命	二〇六
神と神とのなぐりあい	二七六	張奇神	二〇七
瓢を受け取る道士	二七九	幽霊は日光にすがつてはじめて生まれ変わること	二〇八
幽霊の仲人となる	二八〇	悪い幽霊の詐欺が未遂に終わったこと	二〇九
幽霊の三技	二八一	一目五先生	二一〇
陳鵬年公が息を吹いて幽霊を退治したこと	二八三	竜図学士はにせ竜図	二一〇
陳聖濤が会った狐	二八五	酒癖の悪い城隍神	二一一
縛られた幽霊	二八五	禹王の碑が蛇を呑むこと	二一二
符離の旅人	二八六	死屍に鞭うつ	二一二
狐師の狐退治	二八七	獅子大王	二一五
城隍神が人妻に訓誡をしてやること	二八九	劉貴と孫鳳	二一九
紫河車の洗濯	二九〇	妓仙	二二〇
空心鬼	二九二	やき餅の治療法	二二三
因果を傍観した話	二九三	鎮江の某仲	二二六
秦の毛人	二九四	縄で雲を引くこと	二二七
人蝦	二九四	僵尸の野合	二二八
肩風の子	二九五	棺の寝床	二二八
喀雄	二九六	婦安の魚怪	二二九
狼になった老婆	二九九	食物を求める僵尸	二三〇
釘つけの幽霊が逃げたこと	二九九	張光熊	二三一
雷の肉	三〇〇	魂を拘引する番卒	二三三

幽霊の霊のちがい	三六	山陰の風災	三六
幽霊の人ちがい	三六	謝檀霞	三七
城門の顔	三五	幽霊を手引きした話	三八
竿のさきのさらし首	三四	驢馬が難事件を解決したこと	三九
徐の妻の俞氏	三四	蛇の使う草が木を消し金を作ること	四〇
どぶ貝	三三	三姑娘	四一
鶏の足をした人	三三	百四十村	四二
儒にも仏にも入れられぬ魂	三三	詐欺の妙手	四三
瓜州の公子	三二	息子を買う幽霊	四四
随園瑣記	三二	貧乏な幽霊が人に祟り、金持の幽霊は人に祟らぬこと	四五
木令嬢の墓	三一	神になるのは賢人とは限らぬこと	四六
天台県の墓	三〇	蝦蟆の講義と蟻の行列	四七
白骨の精	二九	人參詐欺	四八
万仏崖	二八	人參詐欺	四九
幽霊を追ひ払った幽霊	二七	堀盗人	五〇
首を持つ同知	二六	夜星子	五一
全姑	二五	長樂の怪事件	五二
伊五	二四	生きた死人の墓	五三
伊五	二三	花魄	五四
伊五	二二		
伊五	二一		
伊五	二〇		
伊五	一九		
伊五	一八		
伊五	一七		
伊五	一六		
伊五	一五		
伊五	一四		
伊五	一三		
伊五	一二		
伊五	一一		
伊五	一〇		
伊五	〇九		
伊五	〇八		
伊五	〇七		
伊五	〇六		
伊五	〇五		
伊五	〇四		
伊五	〇三		
伊五	〇二		
伊五	〇一		

述異記

東軒主人作

一 蛇の奇談	六一
二 海の怪異三つ	六二
三 康王廟の虎	六三

四

秋燈叢話

王

械作

四	顔を取る術	三六
五	僵尸	三六
六	宗三旦那	三六
七	幽霊に出会った医者	三六
八	生霊の代筆	三七
九	声色	三七
一〇	頭が三つある人	三八
一一	前世の記憶	三八
一二	変わった節女	三九
一三	魍魎	三九
一四	飛ぶ銭	三九

一	蝦蟇の吸う息	三七
二	花嫁の武勇	三七
三	白い蜘蛛	三八
四	鬼火	三八
五	冥土で会った芸者	三九
六	幽霊の報恩	四〇
七	占いの名人	四〇
八	半身の化物	四〇
九	海の怪物	四〇
一〇	女中の幽霊	四〇

五

諧 鐸

沈 鳳 作

二	答案を教える幽霊	四〇
三	ものを言う死体	四〇
三	仏像の頭を撫でる幽霊	四〇
四	酒を飲む髪	四〇
五	男の花嫁	四〇
六	閨の幽霊	四〇
七	楓橋で会った女	四〇
八	金をもうけた夢	四〇
九	前世の記憶	四〇
一〇	仙人となる道	四〇
一一	書き落とした答案	四〇
一二	美少年	四〇
一三	鑑定の名人	四〇
一四	乞食の相	四〇
一五	文章きちがい	四〇
一六	歩き出す棺	四〇
一七	狐の蓮華	四〇
一八	祈禱師の術	四〇
一九	山中の女	四〇
二〇	生人の気	四〇

一	虎の恋	三七
---	-----	----

二	幽霊を追ひ払った試験の告示	四六
三	医者への代りをした妙画	四三
四	鏡のいたずら	四三
五	金の戒め	四三
六	桃夭村	四三
七	ひどい饑饉	四七
八	ふしぎな縁	四〇
九	森羅殿の点呼	四三
一〇	夢の中の夢	四四
二	鯨人の子男	四六
三	棺から出た手	四六
三	孟婆荘	四六
四	田舎女の毒舌	四三
五	節婦の臨終の戒め	四三
六	化物の遊廓	四四
七	夢の中の家	四五
八	賊を捕えた女中	四六
九	幽霊の婿	四九
一〇	恐妻家の県令	四六

六 耳 食 録

楽 鈞 作

一	鄧 無 影	四六
二	雲陽の化物	四六

三	樊 黑 黑	四六
四	劉 秋 崖	四七
五	胡 好 好	四九
六	毛 生	四三
七	竹冠道人	四七
八	驢馬に乗った男	四七
九	過 陰	四七
一〇	南野の土地神	四八
二	縁の下の怪物	四八
三	胭脂娘	四八
三	田 壳 鬼	四八
四	芙蓉館の庭掃除の女	四八
五	青 青	四九
六	東岳の掌簿	四九
登場人物一覧		四九
地 図		五〇
解 説		五〇

一

閱えつ
微び
草そう
堂どう
筆ひつ
記き

紀き

昀い
作

溧陽消暑錄

序

乾隆五十四年の夏、私は宮中の圖書を整理するため、溧陽（河北省承德）へ出張した。ただ、そのときには校訂作業はとうに終わっており、題籤を書き書架におさめる役人の仕事を監督するだけのことであった。長い昼のつれづれに、見聞したことを追憶しながら記録したが、思い出せばすぐに書くという方式で、定まった体例は少しもない。小説は裨官から出たもので、著述とかかわりのないものとはわかってゐるが、道ばたの立ち話・世間話のたぐいにも、勸善懲惡に役立つことがあるのかと、ひとまず書記にあずけて保存させることとし、『溧陽消暑録』と題した次第である。

一 注

一 宮中の圖書『四庫全書』（解説三頁参照）をさす。この書は乾隆四十七年に完成し、宮中の文淵閣におさめられたが、のちに総計六部の写本が作られ、各地に分散して置かれた。溧陽は清皇室の避暑地だったので、ここに文津閣が建てられ、一部を所蔵することとなった。『四庫全書』は一部が八万巻に近い膨大な書物であるから、写本を作り、校訂・整理するのもたいへんな事業であった。

二 題籤 書物の題名を書きつける紙片。

三 体例 書物の体裁上の一定した基準。ただし紀昀においては形式だけの問題ではなく、内容にもかかわるものと考えられており、『四庫提要』の中ではしばしば書物の体例を論じている。「体例が雑だ」といえば、かなり低く評価したことになり、「体例がない」といえばほとんど書物とはいえないことになる。

四 裨官 後漢の班固の『漢書』芸文志に見える語。ここでは、小説家は古代の裨官、すなわち各地のうわさ話や風俗を蒐集して中央に報告する役人から出たものとされている。

五 著述 紀昀においては、この語は相当にきびしく限定された内容をもつ。『四庫全書』は天下古今の書籍を集める壮大な企画であったが、その任に当った紀昀は、どこまでを書籍と定義するかに苦労したのであろう。その結果、彼は『水滸伝』などの通俗小説をはじめ、通俗的な書物はすべて除外した。「体例」の有無も一つの基準となった。こうして残されたもののだけが、彼にとって著述と呼ばれ得る書物だったのである。

六 書記 日本でいえば佑筆のようなもの。高級官僚の部下で、口述の筆記・原稿の浄写・書類の保存などを任務とする。なお、紀昀は悪筆で（事実はどうであったかわからないが、少なくとも当人はそう信じていた）、草稿を書記の浄写にまかせていたらしい。

一人を見る狐

滄州（河北省滄県）の劉^{りゅう}、士玉孝廉^{（注）}の持つていた書齋が、狐に住みつかれた。狐は白昼に人と対談したり、瓦^{かち}や石を人に投げつけたりしたが、姿だけは見えないのである。

この知州^{（注）}をつとめていた平原（山東省）の董思任^{（注）}は、よい役人であった。このことを耳にすると、追いはらってやろうと自分で出かけて行き、人間と妖怪とでは住む世界が異なり、相互に侵犯してはならぬという道理をさかんに述べたてている最中、急に軒端^{（注）}から朗々とした声がした。

「あなたは役人としてかなり人民をかわいがっているし、賄賂^{わいろ}も取っていないので、私はあなたに物をぶつけようとは思いません。しかしあなたが人民をかわいがするのは、実は名声がほしいからであり、賄賂を取らないのは、あとの災難がこわいだけのことです。だから私はあなたから逃げもしません。もうおやめなさい。よいけいなおしやべりをして、ひどい目にあわないことですな」

董は返事につまづいて役所へ帰り、四五日もぶつぶつ言いながらふさぎこんでいた。

劉の下男^{（注）}の一人に女房があり、まるきり山出しで頭も悪かったが、この女だけは狐を恐れず、狐の方でも手を出さなかった。ある人が狐と対談したとき、このことについてたずねると、狐はこう答えた。

「あの女は賤^{いや}しい仕事をしてはいますが、あれこそほんとうの孝女で

す。神さまでもあれに会えば、つつしんで道を避けるでしょう。われわれなどは、なおさらのことです」
そこで劉は、下男の女房をこの書齋に住ませた。狐は即日、部屋を立ちのいた。

注

- 一 孝廉 郷試に合格した舉人の雅稱。解説三頁参照。
- 二 知州 州の長官。

二 学問の光

愛堂先生から聞いた話。

さる老学者が夜道を歩くうち、ふと死んだ友人に出会ったそうなる。学者は日ごろ剛直な人だったので、こわがりもせず、君はどこへ行くのかとたずねた。すると、

「わしは冥土^{めいど}の役人になっているが、冥府へ連行する亡者^{（注）}があつて南村へ行く途中、偶然君と道連れになったのさ」

そこで肩をならべて歩くうち、一軒のあばら家の前まで来ると、亡友が言った。

「これは文士の庵^{いおり}だよ」

なぜそれがわかるのだとたずねると、

「総じて人間は、白昼はさまざまな動きをするため、純粹な本性は埋もれてしまっている。ただ眠っている時だけは雑念が一つも生じないため、本来の精神が澄みわたり、今までに読んで胸中におさめた書物